

1590年以前の日本語ローマ字資料について

川 口 敦 子

1. はじめに

キリシタン資料における日本語のローマ字表記について、手稿類（いわゆる「写本」）には版本とは異なる「特異な」表記が見られることが指摘されてきた。森田武氏は、日本イエズス会が採用したローマ字表記の写本と版本の関係について、以下のように述べる。

しかし、その綴り方は最初から統一されていたわけではない。同音を異なる綴りで写すこともまれではなく、写本類ではス su, çu を用い、ツに ççu, tçu を用いたりしていた。Feiqe 巻末の書入れ難語句解は、ポルトガル人のイエズス会士マノエル・バレット（Manoel Barreto）の手書と言われ、ヴァチカン図書館現蔵のバレット自筆写本と筆跡を始め、諸注記や記号の使い方、ローマ字の綴り方まで同じであるが、この両写本を通じて、ジャ・ヂに jja, jji をあてた例が見える。これは他に例を見ないものであって、かように特異なものが特定の写本に存することからすれば、日本語の発音を忠実に写そうとして個人的な工夫もしたようである。

写本類にはかような特異な綴りが後々まで交じえ用いられたけれども、1590年7月再度来朝した巡察使アレッシャンドロ・ヴァリニャノ（Alexandro Valignano）によって活字印刷機械一式がもたらされ、キリシタン版の印刷刊行が始まるに及んで、ほぼ統一したローマ字綴り方が用いられるようになった。（中略）

しかし、活字印刷が始まったのは、ローマ字で日本語を表記し始めてから既に数十年を経ており、その間に個人的見解に基づく特異な綴り方をも交じえつつ、ローマ字表記の一般的方式が自ら固まり、慣用されていた。（森田1993：115-116）

ただし、その後の写本（手稿）研究により、筆者の癖による特異な表記とされてきたものの中には、キリシタン版が刊行されるようになってからも写本類で共通して使用されているものもあり、必ずしも筆者個人に特有の「特異な」表記とは言えないものであることがわかってきている（川口2017等）。

森田氏の指摘にあるように、1590年に日本でキリシタン版の刊行が始まるより以前から、日本のイエズス会士は日本語をローマ字で表記しており、それらは手稿類に反映されている。そして、それら手稿類での表記規範がキリシタン版の表記規範へとどのように繋がっていくのか、それを知るにはキリシタン版以前、すなわち1590年以前に成立した手稿類における日本語のローマ字表記を分析する必要がある。

残念ながら、1590年以前のキリシタン手稿類で、まとまった分量の日本語文・日本語語彙を有するものは多くない。

そこで本稿では、これまで日本語資料として注目されていなかった資料に着目し、断片的ながらもローマ字書き日本語語彙を収集するための資料としての価値について検討する。

2. 日本語を含む手稿類：1590年以前と以後

1590年以前・以後ともに、欧文主体の手稿類から、人名や地名などの固有名詞や普通名詞といった断片的なローマ字書き日本語語彙を拾うことは可能である。しかし、まとまった分量の日本語文や、豊富な語彙を収録した辞書や語彙集のようなものは、1590年以前に成立したことが確実な手稿類においては数が少ない。手稿類の表記例としてよく挙げられる「バレット写本」は1591年の成立であり、もちろん、1591年成立ということはそれ以前からの表記を受け継いでいるはずだが、そこまでの変遷を追うことは容易ではない。

筆者が確認した手稿類のうち、まとまった分量と言えるローマ字書き日本語語彙を含むものは、以下に挙げるとおりである。

【1590年以前成立】

《日本語文、辞書類》

- ・1564年5月24日付、ダミアン修道士の書簡（ARSI Jap. Sin.5, f177-179）

《日本語語彙を多く含む欧文》

- ・1585年成立、ルイス・フロイス『日欧文化比較』自筆写本

1590年以降、まとまった日本語文や日本語語彙を多く含む手稿類は多く見られるようになる。以下に主なものを挙げる。

【1590年以降成立】

《日本語文、辞書類》

- ・1591年、マノエル・バレット、「バレット写本」

- ・書写年未詳、マノエル・バレット、天草版『平家物語』（1592年刊）難語句解
 - ・1604年11月18日、日本セミナリオの聖母会の生徒、慶長九年九月二十七日付書簡（ARSI Jap. Sin.33, 76-77）
 - ・1617年10月23日付、石原アンタン父子殉教証言書（ARSI Jap. Sin.17, 317r-319r）
 - ・1619年10月25日付、レオナルド木村の書簡（ARSI Jap. Sin.34, 178r-179v）
 - ・1621年9月14日付、セバスティアン木村の書簡（ARSI Jap. Sin.34, 180r）
 - ・年未詳七月二十八日（1621年9月14日か）付、四名の修道士の書簡（ARSI Jap. Sin.34, 188r）
 - ・1631年頃¹⁾、コリヤード『西日辞書』自筆本
 - ・1632年5月8日付、アンドレ・パルメイロ書簡（Jap. Sin.194-VII, 6r-11v）
 - ・書写年未詳（『日葡辞書』以降か²⁾）、筆者未詳、『葡日辞書』写本
- 《日本語語彙を多く含む欧文》
- ・書写年未詳（1593年までの記事を収録）、ルイス・フロイス『日本史』写本
 - ・書写年未詳（1594年以降³⁾）、アビラ・ヒロン『日本王国記』写本

「バレット写本」や天草版『平家物語』難語句解、コリヤード『西日辞書』自筆本などは、版本との関係が深い手稿類である。書簡や報告書類では、特に1610年代以降のものが目立つ。これはキリシタン弾圧による殉教が増加し、殉教に関する文書が当事者である日本人によって書かれたり、欧文の文書内でも殉教の証言として日本語の人名や地名などが詳細に記されたりしたことが影響していると思われる。

日本関係の手稿類は、イエズス会ローマ文書館（ARSI）所蔵の Jap. Sin. 文書収録のものが、内容・分量ともに圧倒的である。尾原編（1981）は、ARSI Jap. Sin. 文書のうち、上智大学キリシタン文庫がマイクロフィルム（とその紙焼き）で所蔵する文書の目録であり、所収の文書で最も古いものは1548年の「日本通信」である。ローマ字書きの日本語文が主体の文書は、1590年以前では1564年のダミアン修道士の書簡以外に見当たらず、この「ダミアン書簡」が当時のローマ字書き日本語資料として貴重な存在であることがわかる。

ただし、尾原編（1981）は、Jap. Sin. 文書のうち日本関係文書をすべて収録しているわけではない。ARSI の閲覧室で閲覧可能な Jap. Sin. 文書のデジタル画像を確認したところ、上智大学キリシタン文庫が所蔵しない Jap. Sin. 文書の中にも、日本に関係する内容の文書が何点か含まれていることがわかった。

また、日本語学研究ではほぼ言及されることのない ARSI Goa 文書の中にも、断片的ながら日本に関係する文書が含まれていることがわかった。そこで、Jap. Sin. 文書だけでなく Goa 文書も日本語資料として利用できないか、検証したい。

3. イエズ会ローマ文書館所蔵 Goa 文書の日本関係カタログ

ARSI の Goa 文書はこれまで主に歴史研究の分野で、日本に関係する資料が翻刻されたり引用されたりしているが、日本語学の資料としては研究対象とされてこなかった。Jap. Sin. 文書と異なり、Goa 文書にはその全体像を把握できるような目録・カタログの類は現時点で存在しない⁴⁾。電子化された画像を ARSI の閲覧室内に設置された端末で閲覧することは可能だが、これらの画像はオンライン公開されていない。したがって、Goa 文書にどのような資料が含まれているかを把握するには、現地で閲覧調査するしかない。

Goa 文書には1590年以前の日本イエズ会士のカタログ（名簿）が何点か収録されており、特定の語彙に限られるものの、コレジオ等の所在地や日本人イルマンの出身地、氏名から日本語語彙を収集することができる。ただし早い年代のカタログには日本の地名すら記載のないものも多い。

一例として、1589年1月26日付の日本イエズ会士カタログ（ARSI Goa 24, 168r-169v）から、日本語語彙を抽出してその表記を検討する。

日本イエズ会士のカタログについては、複数文書から抜粋して年代順に整理した Schütte（1975）に翻刻があり、Goa 文書所収のカタログの翻刻もあるので、原文の閲覧が困難でもこの翻刻を利用すれば表記の検討もできるという意見もあろう。ただし、実際に原文を確認して比較すると、Schütte（1975）の翻刻には原文の表記を変更して整えた箇所がいくつかあることがわかる。次の【表】に、ARSI Goa 24, 168r-169v の原文から抽出した日本語語彙を含む箇所の表記⁵⁾と Schütte（1975）の翻刻を並べて示す。なお、手稿類ではアクセント記号とティルダ（~）の区別や大文字と小文字の字形による区別が曖昧な場合があるが、そのような例を除いて、Schütte（1975）の翻刻で原文の表記と大きく異なる箇所には下線を付して示す。

【表】 ARSI Goa 24, 168r-169v の日本語語彙

	ARSI Goa 24, 168r-169v	Schütte（1975:272-274）による翻刻
168r 左08	¶ En Cazzuça	¶ En Cazuça.
左11	o Jr. Vomi João	O Ir. Vomi João
左14	¶ En Arima	¶ En Arima.
左18	o Jr. Romão de bungo	O Ir. Romão de Bungo
左19	¶ Quchinoççu	¶ Quchinoççu.
左22	¶ En Arie esta o Collegio	¶ En Arie está o Collégio.

左29	o Jr. Thomé de Firando	O Ir. Thomé de Firando
左30	[] [S]imão de Vomura	[O Ir.] Simão de Vomura
右09	o Jr. Miguel do cami	O Ir. Miguel do Cami <u>[Kimura]</u>
右10	o Jr. Thoma do cami	O Ir. Thoma do Cami <u>[Kimura]</u>
右11	o Jr. Jorge do cami	O Ir. Jorge do Cami
右12	o Jr. Ximizu J ^o do cami	O Ir. Ximizu João do Cami
右13	o Jr. Miqui Paulo do cami	O Ir. Miqui Paulo do Cami
右14	o Jr. Jião do Facata	O Ir. Jião do Facata
右15	o Jr. Marino do Tacaqu	O Ir. Marino do Tacaqu
右16	o Jr. Fr ^{co} de Fiúga	O Ir. <u>Francisco de Fiunga</u>
右17	o Jr. bastiao de bungo	O Ir. Bastião de Bungo
右18	o Jr. Semião de bungo	O Ir. Semião de Bungo
右19	o Jr. Matheus de bungo	O Ir. Matheus de Bungo
右20	o Jr. Cosme de Nagaye	O Ir. Cosme de Nagaye
右21	o Jr. Jião do Cami	O Ir. Jião do Cami
右24	o Jr. luis de Nagasaqui	O Ir. Luís de Nagasaqui
右26	¶ En Chingiua	¶ En Chingiva.
右28	o Jr. Paulo de bungo	O Ir. Paulo de Bungo
右29	¶ En Mie & Ximabara	¶ En Mie e Ximabara.
右30	o Jr. bastiá de Firád[]	O Ir. Bastiam de Firand[o]
右31	o Jr. P ^o de Cuc[]	O Ir. <u>Pedro</u> de Cu[chinocçu]
168v 左01	¶ No Seminario de Fachirauo	¶ No Seminário de Fachiravo.
左07	¶ Na Residencia de Amacuçã	¶ Na Residencia de Amacuçã
左09	o P ^e J ^o Fr ^{co} Jtaliano ê Fondo	O P. ^e João Francisco, Italiano, em Fondo
左12	o Jr. Simão do Fingo	O Ir. Simão do Fingo
左13	¶ Casa de pração ê CauachinoVra	¶ Casa de provação em Cayachinoura.
左17	o Jr. lião do Cami	O Ir. Lião do Cami
左18	o Jr. luis do Cami	O Ir. Luís do Cami
左19	o Jr. Fabião do cami	O Ir. Fabião do Cami
左20	o Jr. João de torres de yamaguchi	O Ir. João de Torres de Yamaguchi
左21	o Jr. Nicolao do Cami	O Ir. Nicolao do Cami
左22	o Jr. Antonio de Firando	O Ir. Antônio de Firando
左23	o Jr. Yofô Paulo de Vacaça	O Ir. Yofô Paulo de Vacaça
左24	o Jr. Augustinho de Vomura	O Ir. Augustinho de Vomura

左27	o Jr. Amador de Nagasaqui	O Ir. Amador de Nagasaqui
左28	o Jr. Mathias do Tacaqu	O Ir. Mathias do Tacaqu
左29	[] Jr. Thome de Sonogui	[O] Ir. Thome de Sonogui
右01	o Jr. Melchior de Nagasaqui	O Ir. Melchior de Nagasaqui
右02	o Jr. Antonio do Cami	O Ir. Antônio do Cami
右03	o Jr. Fr ^{co} do cami	O Ir. <u>Francisco</u> do Cami
右04	o Jr. Mácio de Amacubo	O Ir. <u>Mância</u> de Amacubo
右05	o Jr. Paulo de Sonõgui	O Ir. Paulo de Sonong <u>ui</u>
右06	o Jr. Maximo do Cami	O Ir. Máximo do Cami
右07	o Jr. lionardo de Firãdo	O Ir. Lionardo de Fir <u>ando</u>
右08	o Jr. Jullião do Cami	O Ir. Jullião do Cami
右09	o Jr. Miguel do ysaphay	O Ir. Miguel do Ysaphay
右10	o Jr. Aleixo de bungo	O Ir. Aleixo de Bungo
右11	o Jr. lião do Tacata	O Ir. Lião do Tacata
右12	o Jr. Jgnatio do Cami	O Ir. Ignácio do Cami
右14	¶ Na Jlha de Voýeno.	¶ Na ilha de Voyeno.
右17	o Jr. Miguel de Cazzuça	O Ir. Miguel de Cazzuça
右18	¶ En Nagasaqui	¶ En Nagasaqui.
右26	o Jr. gomez de ýamáguchi	O Ir. Gómez de Yamaguchi
右27	o Jr. Cosme de Miaco	O Ir. Cosme de Miaco
右28	o Jr. Vicète de Vacaça	O Ir. Vic <u>ente</u> de Vacaça
169r 左01	¶ En Conga	¶ En Conga.
左04	¶ En Vomura	¶ En Vomura.
左10	o Jr. Nicolao de ýamaguchi	O Ir. Nicolao de Yamaguchi
左12	¶ Nas terras de Vomura	¶ Nas terras de Vomura.
左16	o Jr. gaspar de Vomura	O Ir. Gaspar de Vomura
左17	¶ En Jlhas de Firando	¶ En ilhas de Firando.
左21	o Jr. domingos de Firando	O Ir. Domingos de Firando
左22	o Jr. Andre de Amacuça	O Ir. André de Amacuça
左23	¶ Nas Jlhas do Goto	¶ Nas ilhas do Goto.
左26	[] Paulo de Amacuça	[O Ir.] Paulo de Amacuça
右01	¶ En o Rn ^o de Bugo.	¶ En o <u>reino</u> de Bugo.
右04	o Jr. Fancão lião do bandou.	O Ir. Fancão Lião do Bandou.

Schütte (1975) の翻刻は内容理解を優先していると考えられる。角括弧 [] で示されるのは欠損箇所の文字の補足だけでなく、168r 右09-10の「Kimura」のように紙に欠損のない箇所でも原文に書かれていない情報を補足するもある。ポルトガル語部分については、アクセント記号等は現代の正書法に整え、縮約形は本来の形に直すという方針が見られる。

日本語語彙については、原文の表記にほぼ忠実だが、鼻音表記のティルダ(˜)を「n」で表記する、「u」と「v」の交替、といった変更が見られる。なお、原文169r 右01の「Bugo」は Bungo または Būgo (豊後) の誤記と思われるが、翻刻では補ったり修正したりしていない。Schütte (1975) の翻刻で示される日本語語彙の表記は概ね信用できそうだが、細かな表記の違いを問題にする場合は注意が必要である。

本資料のローマ字表記の特徴としては、以下の例が挙げられる。

- (1) ガ行・ダ行子音の前の鼻音を示すティルダ表記 (Fiúga, Firád[o], Firādo, Sonōgui, yámáguchi) ・ n 表記 (Conga, Chingiuá, Firando, Fingo)
- (2) サ = sa ・ ça (Amacuça, Cazuça, Vacaça)
- (3) ツ = ççu (Quchinoççu)
- (4) ハ = fa ・ pha (ysaphay)

(1) ～ (3) は、既に手稿類のローマ字表記の特徴として知られているものである。(4) として挙げたハ行子音については、手稿類でも版本と同様に f で表記するのが一般的であり、「ysaphay」(168v 右09) のように「ph」で表記するのは珍しい例と言える。

4. おわりに

ARSI Goa 文書の日本イエズス会士カタログから収集できる日本語語彙は、地名・人名という限られたものになるものの、これから複数の資料の用例を積み重ねることにより、同じ語彙の表記の変遷を観察できる可能性がある。

1590年以前の手稿類で多くの日本語語彙を含む文書を見つけ出すことは困難であろうから、その年代における日本語語彙のローマ字表記の実態を知るためには、成立年の異なる数多くの文書の用例を積み重ねていくことが有効ではないかと考えられる。そのためには ARSI Goa 文書など、これまで日本語資料として注目されていなかった資料も視野に入れ、用例を探すべきであろう。ただし Schütte (1975) のように内容理解を優先した翻刻資料の表記には修正が加えられている可能性もあるため、やはり原文を確認する必要がある。

〔文献一覧〕

大塚光信（1966）「解題」、『コリヤード羅西日辞典』 pp.1-43、臨川書店。

尾原悟編（1981）『キリシタン文庫 イエズス会日本関係文書』、南窓社。

川口敦子（2017）「アビラ・ヒロン『日本王国記』諸本と日本語の表記—チンチョン報告書との比較を通して—」、『三重大大学日本語学文学』28、pp.1-10。

岸本恵実（1999）「解説」、京都大学文学部国語学国文学研究室編『ヴァチカン図書館蔵『葡日辞書』』 pp.457-479、臨川書店。

森田武（1993）『日葡辞書提要』、清文堂出版。

Schütte, Josef Franz (1975). *Monumenta Historica Japoniae I: Textus catalogorum Japoniae aliaeque de personis domibusque S.J. in Japonia informationes et relationes, 1549-1654*. Monumenta Historica Soc. Iesu. <https://archive.org/details/mhsil11> (2024.03.08参照)

〔付記〕

本稿は JSPS 科研費 JP19K00643 による成果である。

本稿は第19回キリシタン語学研究会（2024年3月11日、オンライン会議）における口頭発表をもとに加筆修正したものである。

注

1) 大塚（1966：5）による。

2) 岸本（1999：473）による。

3) アビラ・ヒロンは1594年来日。

4) 2023年9月の現地調査の際、ARSI のアーキビスト Salvatore Vassallo 氏からの回答による。

5) 2015年9月に ARSI 閲覧室内の端末でマイクロフィルムのデジタル化画像を閲覧、2023年9月に ARSI で原本を閲覧した。本稿執筆にあたり、2015年に入手した ARSI 提供の画像と、2023年9月の閲覧による確認をもとに翻刻した。

〔かわぐち あつこ 本学教員〕